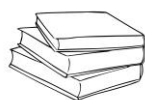


入来花水木会再興に寄せて



中西 喜彦

入来花水木会と「炬ばたセイ談」誌との関係について考えて見ました。本誌は発刊後十八年目を迎えます。

実は故貞子さんは会社退職後平成6年に東京から庵主重朝氏の実家に帰郷されました。翌年には重朝氏も帰郷され、入来花水木会を結成され、郷土の文化振興活動に尽力されました。渋谷五族下向750年に関する記念事業を思い立たれました。平成11年には第1回の薪能を開催され、以後6回まで毎年続けられました。

その後大病を患われ、第7回の薪能は平成22年に再開されています。

一方「炬ばたセイ談誌」は、平成17年に鹿児島ペンシルクラブ同人の一部の方々と身辺記として、身近な自伝や先祖の紹介などを載せて創刊されました。

1号はガリ版刷りからスタートしたと聞いております。自伝的なものや先祖の紹介など、5号や6号などでは自分達の遺言のような印象を持ちました。

平成23年春に貞子さんの不慮の事故死を受けて、7号からは筆者と下土橋氏が編集を受け継ぐことになりました。「誌面で貞子さんに再会」を旗印に貞子さんの履歴や文学、歴史などの著作や上演された薪能を紹介しました。なお、1号から12号は故桐野三郎会長の元で発刊されました。13号から16号までは、最初からの本誌会員であった澁谷繁樹氏が会長となり、その後筆者が会長としてお世話することになりました。

特筆することとして、NHKの「家族に乾杯」で訪問を受けた縁で貞子さんの3回忌に鶴瓶師匠が奥さんやお弟子さんと訪問され法要落語の「錦木」を披露されました。さらに7回忌の様子なども本誌に紹介しております。

毎年会誌発行時に著者達が重朝邸に集まり楽しく会食するのを常としてきました。庵主重朝氏の米寿の祝いや会員の日頃の考えなどが紹介されております。その後、澁谷會長の急逝を受け17号から筆者が会長になりました。特に昨年からは入来花水木会再興の機運が高まり、今年6月に第1回の総会が開催され、本格的な活動が始まりました。

振り返ってみると、最初に入来花水木会を立ち上げられた貞子さんは、朝河貫一博士の「入来文書」の解説書の出版や関連講演会などを開催されました。入来院家と相良家が日

本で一番長く一か所に存続した家であり、特に入来院家は鎌倉時代から幕末まで一か所に存在し、その記録が朝河貫一博士により「入来文書」として紹介されております。それは日本の武士社会とヨーロッパの騎士社会との比較をし、その違いを明らかにしたものであります。

以上のことから会誌発行の十八年間に振り返ってみますと、その内容も時代と共に変遷しております。最近、重朝氏と故安倍晋三首相暗殺事件について話したことがあります。「武士の社会から完全に町人社会に変わりましたなあ。」私も全く同感しました。すべてを他人や組織、あるいは社会の責任にし、自分の責任を認めません。「一所懸命に頑張る」と申しますが、警備担当者が職に命を懸けなかった単純な事件だと思えます。また、昨年入来院の継続性について、その理由につ

いて質問したことがあります。「何もしなかつたことです。」これにも変に私は同感しました。私は重朝氏の直感的な感覚にこの十年あまり敬服してきました。本誌が続いたのも庵主重朝氏の細部にこだわらず、続けていこうと云う姿勢によるものだと思います。また、編集面で7号以来レイアウトや挿入イラストなどに工夫をされてきた下土橋渡氏の工夫によるところ大であります。

5年前父親の介護を兼ねて帰郷された長女久子さんがこの度母親の遺志を継いで入来花水木会を再興されることはまことに時期をえたものと考えられます。本誌がその機関誌としての役割も果たしつつますます発展することを祈念いたします。

(鹿児島謡曲連合会会長、鹿児島大学名誉教授、炉ばたセイ談会会長)

